「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さ」　　２０２２年7月３１日

エフェソの信徒への手紙３：１４～２１

佐々木　佐余子

初めに１４節でパウロは言っています。「こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります」とありますが、こういうわけとはどういうわけでしょうか。そこから考えないと意味が良く把握できないので、３章の前の節から大事なところを学んでみたいと思います。まず、パウロは何と謙遜するのでしょうか。８節をご覧ください。「この恵みは、聖なる者たちすべての中で最もつまらない者であるわたしに与えられました」、と言っています。ここらへんがパウロらしいです。かつて教会を迫害したことを思い出し、懺悔し悔い改めているのです。でも聖なる者たちすべての中で最もつまらない者とは、少し言い過ぎではないかと思います。過去は過去にして、罪赦されて、それ以上に伝道をしているのですから、あまりこだわらない方がいいと思うのです。そして、少し飛ばして１３節にいきますと、「だから、あなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです」とパウロは言います。どうして苦難が栄光なのでしょう。実はここには大事な意味があるのです。よく「十字架なしに栄光なし」と言われます。No cross　no crown です。十字架なくば、冠なし、つまり、艱難無くして、栄光なしです。この言葉で有名な人は皆さんご存じかもしれないけど、ウイリアム・ペンという人です。ウイリアム・ペンはイギリス人ですが、イギリス人なので宗教は国教会の聖公会（アングリカン）なのですが、彼はキリスト友会、それはクエーカ教徒のことですが、その宗派に入会したのです。彼はイギリス国教会を批判した罰で、ロンドン塔に入れられてしまいました。それはとても恐ろしい刑務所なのでした。その獄中で彼は、『十字架なくば、冠なし』という本を書いたのです。彼の父は海軍の偉い人で社会的にも経済的にも政治的地位もありました。その息子ですから父親は期待しながら育てたのです。ところが、それらを全部投げ捨ててしまい親を嘆かせました。彼はイギリスで一般民衆に「キリスト友会」を熱心に伝道したけれど、民衆は聞くことはなく、一路、新大陸アメリカに渡ります。やがて、ペンは親からの遺産を受け、アメリカのペンシルヴアニア（ペンの森の意味）の領地を買って、そこの知事となったのです。彼は、この地を信仰と良心の自由の地にして、迫害に苦しんでいる人を助けようと決意したのです。こうして歴史上いまだかつてない「信仰と自由の国」が建てられたのです。彼は個人の信仰と良心は国から強制された宗教ではなく自由に選べるという法律を制定しました。このことは苦難の道でしたが、彼は重い十字架を負うことによって、民主主義の先駆者としての栄誉・栄冠を与えられました。それ以上に、イエスさまは大きく，重い十字架を負うことによって神さまから栄冠を与えられたのです。

14 節に「わたしは御父の前にひざまずいて祈ります」とあります。普通ユダヤ人は立って祈ると思います。エルサレムの嘆きの壁の前にユダヤ人は顔を近づけて立って祈っています。ここでは膝まずいて祈っています。そういえば、カトリックのミサでは皆膝まずいて

祈っています。それで椅子の下に膝当てがあるのです。そこに膝を置くと痛くないのです。良く配慮しているなと思います。膝をかがめるとは、全き服従を意味しており、主イエスはオリーブ山で祈られた時、膝まずいて祈られました。ステパノも石を投げられた時、膝まずいて祈りました。特別な時に膝まずくのです。１６節でパウロは信仰のお勧めをしています。ここにあるあなたがたの内なる人とは何でしょう。パウロによれば、内なる人とは、その人の心の奥深くにある心です。パウロはコリント書で言っているのです。「たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていく」と語っています。教会につながっていくと段々人は良く変わるのではないでしょうか。私はここの教会の方々と約 10 年ぶりにお会いしましたけれど、変わった人が数名おられることに気が付きました。古い型を打ち破って新しくなった人々です。丁度、この間庭でセミの抜けガラを見つけました。抜け殻はセミの形をしているのです。どうやって抜けるのか見たかったのですが、人の場合は聖霊によって新しくされるのでしょう。人の人格は中々変わらないと思うけれど、そういうことをホーリネスでは聖化というのですね。２７日の水曜日に、親教会の小石川白山教会の役員さんが３名ここに見えられました。懇談会ですがその中で、小石川白山教会の前の牧師の藤田昌直先生はホーリネスの信仰を持っておられたと役員さんが言われていました。そしたら別の役員さんが言われるには、ホーリネスは先の大戦の時、軍に反対して刑務所に入れられ獄死した牧師もいたのだ、と言われたのです。そういえば軍に反対した宗派はホーリネスだけなのです。で私は、ホーリネスはそういう意味で尊敬しているのです。ついでに言うと、聖歌は素晴らしいです。心から湧き上がるような旋律や歌詞で名曲が多くありますね。讃美歌２１は形式的で大人しいというか上品ですね。でも、人によっては感じ方が違うかもしれません。アメリカは、メソジストやバプテスト、カトリックが圧倒的に多いのです。人は少しずつ置かれた環境によって変わります。世間の人から言われます。「クリスチャンは真面目で大人しくて品行方正な人が多い」と。でも教会に入る前はどうだったでしょうか。教会に入れられて少しずつ聖化されるのです。それが大きなご利益ですね。17 節に「信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ」とありますが、キリストを住まわせという表現はすごいですね。私たちの心の内に、神さまが一人一人の心の内にイエスさまをしっかりと住まわせてくださるのです。人間の心は弱いから、神さまはその人その人に確実にしっかりと定着させてくださるのです。そして、愛に立つ者としてくださるようにお勧めをしています。主イエス・キリストをどのような表現で表すのか難しいです。パウロはこのように表しました。キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さは限りなく、無限である、と。言葉ではとても言い尽くされない、言い表すことが出来ないほどなのです。もし、教会に行っていない人から聞かれたらどのように答えるでしょうか。「あなたの信じているイエス・キリストはどういうかたですか？」「そうですね、わたしの罪のため十字架に掛けられ、死んで復活された方です」「福音書に書かれているように人々の病を癒す愛の方です」と、様々な答えがあるでしょう。パウロは「キリストとは測ることのできないほど深い愛をもたれ、愛の広さ、長さ、高さ、深さは無限です」と答えたのです。パウ

ロの生涯を見たら、確かに主イエス・キリストにより救われた人生でした。もし、キリストが天で声を掛けられなかったら「サウル、サウルなぜわたしを迫害するのか」という呼びかけを聞かなかったら、パウロの人生は罪に縛られた律法学者で終わっていたでしょう。他の使徒たちもそうではなかったでしょうか。ペトロ然り、ヨハネ然り、マルコ、マタイ、ルカ然りです。

人の幸せは何でしょう。『青い鳥』というメーテルリンクという人が書いた童話があります。ある貧しい家にチルチルとミチルという兄妹がいました。2 人はいつも近所のお金持ちの家をうらやましく思っていましたが、ある日魔法使いのおばあさんから、青い鳥を捜すよう頼まれました。「私の娘が病気で、幸せの青い鳥を欲しがっているので探してくれないかい」と。最初に行ったのは「思い出の国」でした。そこには亡くなった 2 人のおじいさんやおばあさんがいて、2 人に会ってとても喜びました。そして、思い出の国にいた青い鳥をくれました。ところがその国を出ると、青い鳥は死んでしまったのです。次に行ったのは夢の国でした。そこにはたくさんの花が咲き、青い鳥がいました。2 人は捕まえて籠の中に入れましたが、やはり外に出たとたん、死んでしまいました。次に 2 人は贅沢な御殿やこれから生まれてくる赤ちゃんが暮らす「未来の国」に行きました。しかし、同じように青い鳥を鳥かごに入れて帰ろうとすると皆死んでしまうのでした。2 人はがっかりしてどうしてよいのかわからなくなってしまったのです。疲れ切った 2 人に「起きなさい、今日はとても良い天気よ」お母さんの声でした。ふと見ると 2 人の鳥かごに青い鳥がいるではありませんか。チルチルとミチルはやっと気が付きました。「そうか、幸せとは案外自分の近くにあるものかもしれない」と思ったのです。2 人は思いました。「そうだ、この青い鳥をおばあさんにあげよう。きっと娘さんも喜んでくれるよ」というお話です。私たちは信仰を与えられて、今この生活が青い鳥なのです。キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さを知っている私たちは青い鳥を籠の中に入れているのです。毎朝お水をあげ、はっぱをあげ、粟をあげて大事に育てています。このかごの中で青い鳥は美しい声で鳴くでしょう。主日礼拝毎に集められ、礼拝を捧げることが青い鳥なのです。讃美歌にあります。522 番「キリストにはかえられません」　世の宝もまた富も、有名な人になることも、世の誉れも、キリストには代えられません、と歌います。そして、大事なことはキリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さは贖罪の業を語っています。これが一番大事なことです。キリストの贖罪は測り知れない愛なのです。神は人間のためにご自分のかけがえのない一人子をくださいました。神の断腸の思いです。ある神学者は身銭を切って、と表現しました。身銭とは何でしょう。身銭とは自分のお金です。身銭を切るとは、自分自身のためではない事のために、自分のお金を使うことです。神さまは、エデンの園で自分の戒めに背いて、蛇に従ったアダムとエバを園から放逐しました。しかし、2 人の子孫のために、身銭を切って救おうとされたのです。そのことがイエス・キリストのご降誕の出来事でした。旧約聖書と新約聖書はつながっているのです。ですから神は愛です、というのですね。最後にパウロは頌栄で閉じます。20 節と 21 節「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超え

てかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」と結んでいます。このような神を称える頌栄を牢屋に入って不自由な生活をしている人が書けるでしょうか。普通は神を呪い、皇帝を呪い人生を呪い不幸な自分を呪って恨みの人生になるのではないでしょうか。パウロは神のみちあふれる豊かさのすべてにあずかり満たされているのです。